

五戸川 多様な生態系回復

弘前大農学生命科学部の矢田谷健 助教(49)の研究室は、魚が河川の段差を行き来できるように、青森県が2023年に五戸川の2カ所に整備した魚道の効果を調べた。魚道を遡上する魚を調査した結果、アユやアメマス、遊泳能力が弱いドジョウなどを捕獲。近年は魚類の個体数の減少も懸念されていたが、かつての多様な生態系を取り戻しつつあることを確認した。(田村純也)



五戸町切谷内で行われた、矢田谷研究室による五戸川の魚道調査。石を敷き詰めた部分が魚道で、その上に網を設置して魚の遡上を確認した11月6日、五戸町

弘大・矢田谷助教の研究室

県整備の魚道効果を調査

五戸川に整備した魚道の仕組み



矢田谷助教の研究室では、河川を横断する構造物により、魚類の移動を阻害しない手法として、魚道の設置を研究している。県は10～20年、五戸川の農業用水を取水する「頭首工」6カ所に魚道を整備した。しかし、五戸町切谷内地区と佐野地区で、頭首工とは別に設けられた1段超の落差工を、魚が遡上できずにいる様子が見受けられた。生態系への影響を懸念した同町や新郷村の釣り愛好団体「疑似倶楽部」らが、

「インク」(相内一晃会長)が、県に落差工の魚道整備を要請した。今回の調査には釣り愛好団体の本田雅弘さん(同町)が同行した。本田さんによると、かつて五戸川ではアユやサクラマスなどの遡上を数多く見ることができ、生物資源が豊かだったという。矢田谷助教によると、魚が遡上できず滞留したままになると、魚が餌を確保できなかつたり、鳥に食べられる可能性が高まったりするなどの理由で、個体数の維持に影響するという。県は23年7月に落差工の魚道整備を実施。同大の東信行教授と矢田谷助教が、魚道の設計などで技術協力した。河川横断物のへりを一部削り、直径30～50センチの石を扇状に配置した。魚道整備の効果を調べる



魚道調査で設置した水中カメラの画像。魚道を遡上するアユが確認された(矢田谷健一助教提供)

ため、矢田谷助教の研究室と釣り愛好団体は今年6月25日から3日間、調査を実施した。高さ1・1メートル、幅1・2メートル、奥行き1・5メートルの鉄格子に網を張り、落差の高い方に設置。1日3回網を上げ、遡上した魚種と数を調べた。その結果、7種類の生物を確認。数が多いのはアユとアブラハヤだった。水中カメラも設置し、アユが遡上する場面を捉えることにも成功した。アユは川底に生えるコケを好んで食べる。矢田谷助教は「良好な餌場がある上流へ移動しやすくなったことが確認され、個体数の増加が期待できる」と分析する。本田さんは「予想以上に多くの生物がいて、いい川であることが証明できたと思う。魚道整備を要請して良かった」と喜んだ。

この画像は、当該ページに限って”デーリー東北”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。